

新刊紹介

スピノザの哲學

稻富榮次郎著

周知の如くスピノザ哲學に於ては絶對無限の實體即ち神が最高唯一の實在であり、この神と我との合一即ち解脱を求めることが、その哲學研究の根本動機である。然るにスピノザによれば神との合一は只神を十全に認識することによつてのみ可能である。されば絶對無限の神を相對有限の人が如何にして認識せらるゝかといふ事がスピノザ哲學の中心課題でなければならぬ。しかし神の全實在が何等餘す所なく、有限なる人間の意識内に攝取せられるだらうか。少しでも神の實在性が不可知的な物として意識の外に残留するならば、も早や十全なる認識ではない。故に一應はスピノザの哲學の求むる所は無意味なる徒勞に終るものゝやうに思はれるので、カント以後の立場よりしてスピノザを獨斷論の最も完全なる實例を説かれる所以である。

本書の著者は東北帝大を卒業してスピノザ哲學の研究に没頭せられる若い篤學者である。スピノザ哲學に於ける神の十全なる認識が如何にして可能であるかを闡明せ

んが爲に、まづ神の屬性の意味を明かにし、無限の屬性中に於て思惟の有する特異なる地位を確め、知るは思惟が思惟自らを自識することであるを論定し、更に實體の不可分性から演繹して、實體とは要するに萬有一貫の合法則性即ち真理其物に外ならぬことを説き、スピノザの所謂平行論の根柢には合法則性の自同性が豫想されねばならぬことに及ぼし、神が自らを具現する道は有限なる所與的限定を通じて無限の實體を表徴する事以外には考へられぬを斷じ、これをレヴェエークの語によりクワテヌス^{II}デウスと名づけ、然も人にまつて神を具現すべきクワテヌスは人間精神中で優れた部分たる悟性あるのみであるから、スピノザの認識論はつゞまるこころ悟性論となり、悟性の改良(エメンダチオ)が當面の問題となる。かくて最後に認識の三段階を述べ、その最高段階たる直観知は知る者が虚なる立場にありて超越の極限に内在の極限との合致點に個物を映することであるを論定し、この世界こそ神の知的愛によりて人間と神とが渾然融合する神我一如の法悅境であるを諸論したのが本書構成の大意である。

スピノザ哲學全體の研究としては尙不足の部分もあらう。例へば無限なる實體又は屬性から、如何にして有限

なる個物が生ずるかの如き問題は本書に於て解明してないやうであるが、本書當分の目的たる諸問題に就いては著者の主観が時として挿入され、スピノザから若干離れて、やゝ自由に解釋してあるかの如く感ぜられるやうな場合もあるけれども、廣く諸文献を涉獵し、彼此較較して是非を分ち、平明流暢な文章を以て、繁に失せず、簡に流れず、著者の沈潜思索した結果を披瀝してある スピノザに關する邦文著述の少い我が哲學界に取つて歡迎さるべき好著作であらうと信ずる。(高橋紹介、理想社出版部刊行、菊版二二二頁、定價一圓九十錢)

デイルタイ論文集

栗林 茂譯

本書はデイルタイの著作「ヘーゲル青年時代史」の第一章「最初の開展と神學研究」を、一九一一年五月の雜誌ドイツツェールントシヤウに載つた「ニーブルの歴史的世界觀の起源」を、一八八六年八月の講演「詩的想像力と狂氣の三篇を譯したものである。豊富な歴史の形態に對する非常に鋭敏な感覺を持つて居り、精神の種々の領域に於て嘗て生きてゐた種々の時代の生命を源泉から再び現在化し、新たに生かすことが出來た」と評されるデイルタイ、ヘーゲル以後の最大なる精神史家たるデイルタイの歴史家としての一面は前の二篇によつて窺はれ彼

れの文學論の一斑を後篇によつて窺はわうであらう。譯文は平明であり、固有名詞その他外國語の發育の表記は、出來るだけ原語に近いやうに苦心してある。(丸善株式會社發行、菊版一一八頁、定價一圓三十錢)

寄贈圖書

哲學とは何か

デイルタイ・フツセアール・シエーラー著

戸田三郎・坂田徳男・三木清共譯

東京市 鐵塔書院發行 定價二圓三十錢

哲學

學

第六輯 三田哲學會編
東京市 丸善株式會社發行 定價一圓八十錢

寄贈雜誌新聞

哲學雜誌	昭和五年三月	第五一七號
社會學徒	同 三月	第四卷第三號
大谷學報	同 三月	第十一卷第一號
商學討究	昭和四年十二月	第四冊下
基督敎研究	昭和五年三月	第七卷第二號
信濃敎育	同 三月	第五二一號
精神科學	同 三月	第五卷第一號
丁酉倫理會講演集	同 三月	第三二九輯